

鹿大病院ロボット手術強化

鹿児島大学病院(鹿児島市)は20日、病院内に「ロボット手術センター」(センター長・小林裕明(産科婦人科教授))を設置したと発表した。ロボット手術をする5診療科や職種の垣根を越えて技術



ロボット手術センターの設置を説明する小林裕明センター長(右) 11月20日、鹿児島市の鹿児島大学病院

5診療科連携しセンター設置



鹿児島大学病院が導入した手術支援ロボット「ヒノトリ」(同病院提供)

の共有や連携の強化を図り、患者の体に優しい安全な手術を目指す。手術支援ロボットは、患者の体に開けた小さな穴から手術器具を入れ、執刀医が3次元画像を見ながらコントロールして遠隔操作する腹腔鏡手術の支援システム。出血量が少なく、術後の回復が早いなどの特徴がある。鹿大病院では2017年4月から米国製の手術支援ロボット「ダヴィンチ」が稼働。22年11月に国産初の手術支援ロボット「ヒノトリ」を導入した。ロボット手術は17年が20件程度だったのが、保険適用の拡大に伴って22年は10倍以上の

約290件に増えている。

会見で坂本泰二病院長は「今後の外科医療の中心はロボット手術になる。センター化して診療、教育、研究をより効果的に行う」と強調。小林センター長は「鹿児島は多くの離島を抱えており、(ロボットを使った)遠隔手術の研究もセンターの役割」と述べた。

12月1日設置のセンターは産科婦人科と泌尿器科、小児外科、消化器外科、呼吸器外科で構成。勉強会などを通して連携を図る。今後は保険適用手術がある耳鼻咽喉科や心臓血管外科の参加も見込む。

九州では大分大学が22年6月に「ヒノトリ」を導入し、「ダヴィンチ」などの2台体制で運用。低侵襲手術センターを開設している。(山下翔吾)